

母の日

5月13日は「母の日」です。

「母の日」は、日頃の母の苦勞を勞り、母への感謝を表す日とされていますが、その歴史を辿ると、1907年5月、アンナという方が亡き母を偲び白いカーネーションを贈ったというのが、アメリカにおける「母の日」の事実上の起源とされています。

日本の「母の日」は、1931年に昭和天皇の皇后様の誕生日（3月6日）を「母の日」としたのがスタートとされており、その後、1945年頃からアメリカに倣って5月の第2日曜日を「母の日」として祝うようになったといわれています。

私の母は既にこの世を去って久しいのですが、にもかかわらず母という言葉を聞くと何かしら胸が騒ぎます。それは、幼い頃の記憶と重なるせいかも知れません。

「親孝行、したい時には親はなし」というのはその通りだと実感しています。

私は、母親を泣かせるようなことだけはすまいと思って生きてきましたが、果たしてどうだったのでしょうか。今となっては、確かめる術はありません。

たわむれに母を背負いてその余り

軽きに泣きて三歩あゆまず

これは石川啄木の歌です。

私の母はある日突然倒れ、意識を回復しないまま13年間療養を続け、病院で亡くなりましたので、母を背負う機会はありませんでしたが、今は亡き父を背負ったことがあります。父が病に倒れ、一端入院先から自宅に戻った時、車から家の中まで父を背負い運んだのですが、肩幅も広く頑丈だった父が私の背中に納まる程に小さく、軽くなってしまったことに驚くと共に、こうなる迄に、息子としてもっと為すべきことがあったはずだという悔悟の気持ちがこみ上げてきたものです。啄木の気持ちも、あるいは同じものだったのかも知れません。

今劇場で公開されている「わが母の記」の中にも、主人公の伊上洪作が海岸で母親の八重を背負うシーンが出てきます。この映画は、作家井上靖氏の自伝

的作品であり、見応えのあるものとなっています。

洪作は、幼少の頃家族から離れ、1人曾祖父の妾だったおぬいの元に預けられます。このため洪作は、ずっと「自分は母親に捨てられた」と思いこんでおり、それが母親との深い確執となっていました。その母八重は、痴呆症が進行して殆どの記憶が消えていきます。ついに息子のことまで分からなくなってしまうのですが、「洪作をおぬいの所に預けたのは一生の不覚だった」というのです。

ある時、母八重は勝手に家を出てしまい、家族総出で捜した結果、洪作は沼津の小浜海岸で母八重と再会します。洪作は、母八重を背負いながら、何もかも分からなくなっているはずの母から息子を手放さざるを得なかった経緯を聞かされます。そして、息子を手放したくないと思いながらも、おぬいに預けざるを得なかった母としての苦しみや悲しみ、そして息子への尽きせぬ愛情を知ることになります。

どんなに記憶がなくなっても、息子との別れのことをだけは鮮明に覚えている。洪作は、母を背負いながら、その母の愛情の深さに触れて、昔年の確執が氷解していきます。

結局、洪作が「自分は母に捨てられた」と思い込み母を恨んで来たのは母親に対する愛情の裏返しであり、母も息子もちゃんと臍の緒で繋がっていたということでしょう。

この映画の中では、井上靖さんの邸宅も撮影に使われていますが、改めて大作家の生活ぶりや書斎の凄さに圧倒されました。

旭川市内には井上靖記念館がありますが、この度井上靖邸から書斎応接間を移設し、リニューアルオープンいたしました。行って見たい衝動に駆られています。(塾頭 吉田 洋一)